

世の中にあるほとんどの金属類は兵器とするために、強制的に國家に提供させられましたが、鐘も持っていかれたままで。

後に、戦争が終わった次の年の夏、父と伯父がその鐘を探しに、瀬戸内海の島に行くのに、わたしも従兄と一緒にいって行きました。直島というその島には、金属類を鑄造する精錬工場がありました。無数の鐘の群れが、兵器になる間もなく終戦を迎え、夏の大陽の下に野ざらしで居並ぶ風景は、どこにも異様でした。父と伯父は鐘の群の中を歩きまわって探していましたが、わが神社のそれを見つけたことはできませんでした。従兄とわたしは船にも乗れず瀬戸内海で海水浴もできず、幼い記憶に鮮明に残るうれしい遠足の1日でした。

父の戦争

座敷の畳に伏して号泣している母のかたわらで、途方にくれている幼いわたしがいます。母はこのとき、父を出征兵士として送り出し、駅頭での盛大な見送り行事から帰ってきたばかりだったのです。30歳を出たばかりの母の着物の色が明るく、それが夫を送り出す晴着だったのでしょう。

嗚咽に揺れる母の背中、その羽織の下に帯の結び目が盛りあがっていました。駅から家に戻りついた母は、羽織も脱がずに泣き伏していたことになりませぬ。それが、いつの年なのか分かりませんが、多分1942年から3年でしょう。

その時、表に来客の声がして、わたしはほつとします。母は唇に返事をして、今泣いていたことを言わないようにと、わたしに釘をさして出ていきました。客は、母の親しい女性で、慰めにきたのでした。

個人としての悲しみの深さと、それを隠さなければならぬ社会への顔との相克に、幼いわたしでもさすがに気がつきませぬ。父の見送り風景の記憶はおぼろです。駅頭の歓送風景のにぎわいが脳裏にあるような気がします。

それは後に見た映画かテレビかのシーンかもしれません。

平和な田舎町に戦争は、空襲とい



戦中の墨塗壁の痕跡（左上）

う形を見せませぬ。ときたま、戦闘機の編隊が盆地の上空をかすめて、山の向こうに消えていきました。それでも飛行機から目立たないように、白壁土蔵に墨を塗った家もありました。いままその墨が残っている民家もありますが、次第に消えて行きます。その保存を考えなければならぬでしょう。

出征した父の行き先は、意外に近くの兵庫県の姫路市にある國室で有名な姫路城郭内にあった兵営でした。終戦まで国内に居たのですから、母の嘆きは幸いにも無駄だったのです。

その兵営の父に面会に、母に連れられて行った記憶が、少なくとも2回あります。兵舎群の間の庭のようなところで、持っていた母の手づくりのご馳走を親子3人で食べました。桜の花が咲いていたような気がします。

その食後でしょうか、親子3人で街を一緒に歩いているとき、突然、父がピンと首を伸ばして、手を額に当てる敬礼をしました。街で上官に出会ったならそうしなければならぬのです。またあちらを向いて敬礼、またこちらを向いて、と、これじゃ街を歩くのが大変だと思っただけでした。

なお、わたしの記憶はありませんが、父はその前の満州事変と日中戦争にも兵隊として中国に出征しており、三回もの戦争から生還した強運の人でした。敗戦時は伍長の位で、一介の通信兵だったようです。わたしに戦争体験を語ったことは全くありませんが、戦友会にはよく出ていたようです。

帰らなかった叔父

母の末弟が結婚したのは、1942か3年だったでしょう。にぎやかな婚礼は母の実家で行われました。嫁入り先の家で式をあげるのが、当時のしきたりでした。その夜はそこに泊まりました。花婿花嫁も同じ屋根の下でした。真夜中に起きたわたしは、お嫁さんを見たいといひ出して、大人たちを困らせた、今でも母と伯母の笑いぐさになっています。

その叔父は、新婚1年ほどで戦争に行き、そのまま南方の海に消えてしまいました。残された新妻はほどなく女の子を生みました。農婦として家と田畑を守り、父の顔を知らないひとり子を育てたその叔母は、母の生家に健在です。

そう言えは、父母の親戚で戦争から帰らなかったのはこの叔父だけです。当時としては戦争悲劇が少なかつたほつたかもしれませぬが、後に残された叔母と従妹の苦労は計り知れないものがあります。

銃後の（戦地でない国内を）言いました。女たちも、間接に戦争にかり出されていきました。戦争末期にはもうガソリンが無く

なつてきて、松の根っこからとる油をつかうのだと、女たちは山に行かれました。ついでに幼いわたしは遊ばだけでしたが、大きな松の木を倒すのも、重い根を掘り起こすのも、女たちには大変だったはずですよ。

その頃は、戦争にかり出すために人口増加が必要であり、「生めよ殖やせよ地に満てよ」というキャンペーンのもと、こどもを生むことは戦争時代の女たちの重要な役目でした。

わが家では42年と44年に、弟たちが生まれました。そのころは家に産婆さんがやってきて出産したので、家の前庭で産声を聞いた記憶がありますが、あれは下の弟でしょうか。わたしには幼くして病死した2歳上の姉がいたそうですから、母は4人の子を生んだのです。

帰ってきた父

終戦も間近いころでしょうか、父と母が2ページしかない新聞を見ながら、こんな記事を書いてよいのか、これじゃそろそろおしまい、か、というふうなことをひそひそと話していた様子が記憶にあります。あれは父が一時帰宅していた時でしょうか。時々姫路から、外泊に帰ってきていました。

そのころ紙はなくなり、新聞社も合併して一地方一紙となり、朝刊だけが一枚裏表2ページでした。幼年時のことですから、新聞を読んだ記憶はありません。毎日、記事のほとんどは戦勝を伝えるものだったのが、その日は旗色の悪い戦況が載っていたのでしょう。

戦争が終わりました。疎開児童たちも産屋に帰って行きました。あちこちで男たちが帰郷してきたことを聞くにつけ、父がいつ戻ってくるか、待ち遠しい日々でした。

生家は、神社の参道の長い階段の坂道の上にあります。毎日、窓から坂下を眺めて、父の登ってくるのを待ちました。ある日、本当に父が登ってくるのです。母に大声で知らせる外に飛び出して抱きついた覚えがあります。

それは母に聞くと、1945年8月31日だったそうです。終戦ほんの2週間目ですが、少年には随分長く待ったような感じがしています。

今考えてみれば、父母ともにその時35歳、肉親を失つたのがあたり前の時代に、両親共に若くそろったのは幸なことだったのです。

しかし、子どもの身にも切実に分かる戦争の苦しみは、このときから始まるのです。食料戦争です。

少年の日の戦争

伊達美徳

(後編) 空腹と変節の日々

学校での生活

戦争教育については、低学年ですから、あまりそれらしい記憶はありません。修身の時間に校長先生が教室にやってきて、神話の話をしたような気がします。

校庭で毎日の朝礼の時に、段の上に入った先生だったか上級生だったか、モールス信号の機械で、なにかフレーズを打ってみせます。分かった生徒は手をあげて答えます。

もちろんわたしには手におえませんでしたが、今のクイズのようで面白く好奇心が湧いて、伊東(イ)、路上歩行(ロ)、ハーモニカと、一生懸命に信号を覚えたものです。こうして、銃後の少年(これも当事者の堂々語)が育っていました。

戦争が終わると、月に一人ぐらいの割合だったでしょうか、学級に編入生がやってきました。ほとんどが引き揚げ者。つまり当時の植民地だった台湾、中国東北、朝鮮半島などからの帰国者のことです。状況によっては、今の残留孤児たちと同じ運命になっていたかもしれない人たちです。

近くの美袋(みなぎ)という町の小学校に、満州の奉天(現在中国東北地区の瀋陽)から女の子が引き揚げてきました。後にわたしと出会い、わがつれあいとなる人です。

転入生にはじめは違和感をもっていても、子どもはすぐに仲良くなりましたし、たいいてい一年遅れなこともあってか勉強もよくできて、田舎の子には刺激になりました。

その逆に、戦争中に親戚に縁故疎開でやってきて机をならべていた子どもは都会に帰って



祭礼の日、神輿の前を行く若き父

行き、あるいは親を失った子がどこかよその親戚に引きとられてきました。

ある日、そうやって転校していった一人の女の子が何か事情があったらしく、1年足らずでまた舞い戻ってきました。その子があると東京弁らしき言葉を話すのです。たった1年でなんだよ、きどるなよ、と、いじめにありました。

今思うと、田舎からの転校生が東京で馬鹿にされないように頑張った結果でしょう。向こうでも、いじめられたのかもしれない。混乱期にあちこちと転校して大変だったろうと、かわいそうなことでした。

食糧戦争

戦後は飢えの時代です。幼い少年にとっては、実際にはここから戦争が始まったようなものです。小作米が入らなくなったので配給だけでは生きていけない普通の家になりましたから、父母は食糧の調達に苦労していました。

神社の広い境内は芋畑に転じ、竹藪のタケノコも春の食糧になりました。秋には大木の銀杏がたくさんの実を落とし、それも重要な食べ物でした。母の実家が農家でしたから、比較的恵まれていたのかもしれませんが、それでも空腹の日々でした。

5人家族が食べていくのは大変なことで、親は食糧買い出しにいられたのですが、これもよく分かりません。なによりも、戦後の宗教に組み入れられた神社と、それまでの土俗的な氏神とは大違いで、価値観の大転換で神主という職業がなりたなくなりました。

戦争時は、全国にきめ細かく配置された神社は、神社本庁のもとに統括され、戦争を鼓舞する役目を果たしました。文字通りに神の国(今の森喜朗総理大臣は私の同年ですが、こんな死語を今になって普通に言えるのが不思議です)の出先機関として、戦地での武運長久(これも死語ですね)を祈り、戦死した兵士を英霊としてたたえる行事の場だったのです。

もともと父が不在のわたしの生家の神社では、その行事は誰か近くの神社の神主がなさっていたのかしれません。父が帰ってきたからの戦争直後の1時期、時を経て戦地から帰ってこない夫や息子の身を案じて、無事な帰還を神に祈念するひとひとが、頻りに参拝に来たこともありました。

今と違って、義務教育の教科書も給食も有料でしたから、学校へのいろいろな支払いについての親の態度で、わが家の経済状態が少年にもよく分かりました。数年後に父が高等学校に職を得るまでは、家計は大変だったようです。

大人たちは、いつも食糧調達の話ばかりしていました。それが大人の通常の会話なのだとわたしは思っていたのですが、ある日、伯父が誰かとの話に、こんな食糧物の話ばかりして世の中困ったものだというのが聞いて、これは異常なことなのだと気がついたところがあります。

ところが食料調達の話はとくに終わった今も、戦後から続く大人の話があります。それは住宅調達のことで、食糧に次いで大人たちの重要な話題が住宅問題だったので、半世紀以上たってもこの問題は本質のところ解決していかなくて、いまだに戦後を引きずっています。戦争後のヨーロッパ諸国と大きく違う日本の政策の奇妙なところですよ。

空腹の日々

小学校に給食が始まりました。脱脂粉乳を湯にかしたミルクと、マイロ粉という輸入トウモロコシ粉のコッペパンがメインで、たまに干した果物がついたりしました。当時でも美味だったとは言えませんが、空腹のこともには嬉しかったものです。多分、一番喜んだのは、一食分を食べさせなくてもよくなった親たちです。

わたしも含めて多くの子どもが栄養状態が悪くて、肝油という実にまずい栄養剤を学校から支給されて、のまされていたことがあります。衛生状態も悪く、廻虫という寄生虫にもとりつかれました。

空腹の記憶は、どうも恥ずかしいようなことばかりです。台所で飯釜に手を入れて盗み食いして叱られたこと、母の里の祭のこ馳走を腹一杯食べすぎてひっくり返って笑われたこと、弟のおやつをとりあげて叱られたこと、パン屋が美に横柄だったこと、チウイングガムを拾って食べたことなど、今思えばつまらないこ



まだまだ貧しい戦後の少年少女たち (1951.3. 高粱北小学校為永学級にて 左から4人目が私)

となのに、なんだか傷跡のような記憶です。

まともな主食はなくて、朝早く行列して買った水ぶくれこんにやく、麦のほつがはるかに多いお粥、野菜たくさんさんの雑炊、薄いうどん粉団子のすいとん汁(団子汁といいました)、蒸したさつま芋(これは馳走)などが主役でした。

もちろん、これらが同時に食卓に並ぶことはありません。それも、少ないので兄弟喧嘩にならないように厳密に一人あたりの量がきまつていて、食へ終わっても空腹でした。

空腹なら動かなければよいのですが、幼い少年ですから空腹を忘れて飛びまわって遊び、遊び終わると突然の空腹で、毎日なにかたべるものない〜と、親を困らせていました。これも、人にそう言われて、なにもない〜と返事する親の身は、実に辛かったことでしょう。

供給側の親の苦労と比べる、消費側の些末なことはかりのよつですが、少年にとつてはいずれも重大で、あまり思い出したくないことばかりです。あの頃の親たちは自分の食べる分を減らし時には食べないで、こどもに食べさせてくれていたはずで

す。
いま日本の食糧は、エネルギー換算では6割、穀物だけみると7割以上が輸入だそうですね。進行する発展途上の人口爆発で、そちらに食糧が回される時代が近いうちに来ます。その時に日本は、また飢えるのではないかと、飽食の時代の中で心配しています。1991年の大凶作だった事件をもつて忘れていません。減反した田はすくには生産地に戻りませんが、郊外の田畑をつぶす開発はもつやめて、農業を育てておかないと、21世紀の日本は危ない



1948年頃の高粱の旧城下町市街(南より) 1990年代の高梁旧城下町市街(北より)

変節する大人たち

予科練帰りという言葉がありました。予科練とは戦闘機に乗る少年訓練隊だったよつです。少年さえも戦争に駆り出さざるを得ない末期の状態だったのです。戦後そこから帰ってきた者は「よかれんがえり」とよばれ、不良青年の代名詞でした。

かれら17、8歳の少年が、軍人になって連合軍と闘うべく養成を受けていたのですが、敗戦でなすべもなく家に帰ってきた。若くして死ぬべき人生の目標を突然失って、反対に生きなければならぬことになり、そのあまりの大転換に幼い頭はついて行けず、自暴自棄となった彼らは犯罪予備軍となったのです。近所にもその青年がいて盗みや暴力沙汰を起こして、大人たちは、あいつには困ったものだと話していました。その後、どうなったのか知りません。

その大人も実は価値観の転換に戸惑って、右往左往です。子どもには直接には分かりませんが、昨日まで戦争賛美の人が、今日は民主主義を唱えるのでした。小学校の教育のやりかたも変わってきました。

教室の席の並び方が、何度も変わった記憶があります。黒板に向いて先生の話や授業から、みんなで話し合つて考える方式に変わったらしいのです。ところが教師もよく分かつていないらしく、グループに分けたり、丸くならべたり、四角にしたりまた黒板に向くようにしたりと、あれは実験していたのでしょうか。小学校4年から5年でしたが、ある日の授業中に、黒板に書いた文字を消しながらの担任の教師の言葉です。

「今ここに、なにが書いてあつたか、覚えている人は手を挙げろ」
そして付け加えた言葉が、
「今は、こんなやりかたは、いけないんだけど、」
この弁解がましい言葉が奇妙に心に残っています。

多分、それは戦時中の記憶第一主義の教育のやりかたで、これからはやってはいけないと、上のほうから言われていたのでしょう。先生がこどもに弁解するのもおかしいものだと、こどもにも思つたことです。

墨塗り教科書

教科書が問題でした。教育方針が180度転換して内容を変える必要があるけれど、用紙がないし印刷も間に合わない。とりあえず戦争教育の問題箇所を墨で塗りつぶして、使えるところだけで再利用しようとなつたりしいのです。

それまで使つていた教科書のあちこちの文章を、学校からの指示にたがって、母と一緒に筆で黒く塗つてゆきました。これまで教科書は大切に汚さないようにといわれていたのに、こんなことでもよいのかと、変におもいました。

でもそれは、なんだか面白い作業でもありました。あちこち消すことで、終わりのページまで読むことになり、ちよつと勉強した気になりました。消すところは国語の本に多くて、どういつわけが理科にもあつたよつな気がします。消しながら、どういつこれを消すのか、不思議に思つたところもありました。これはもしかしたら、母がそいつつたのかも知れません。

次の年、印刷した新しい教科書がきました。ところが、それは製本してありませんでした。8ページ分が1枚になったままの何枚かの紙でしたので、それらを切りはなしてページ順にそろえて自分流の表紙を付けて1冊の書物に作り上げました。製本の工作をしたよつなものです。いまだに製本デザインや編集が好きなのは(このホームページもその成果のひとつ)、その時の後遺症かもしれません。

戦争中もそうでしたが、その頃は学年の変わり目に、教科書を次の学年の子にゆずるのが普通でした。近所の子どつで、誰のを誰にと約束をしていました。今で言つたりサイクルですが、その頃の本当に物が無くてのリサイクルと、今のよつな物が余つていてのリサイクルには、取り組みの真刻さに大きな違いがあります。

占領軍と天皇

いかに戦後らしいこどもの遊びで、当時の日本占領軍や朝鮮戦争の国連軍幹部の名前を自分に付けて、互いにそう呼んでいたことを思い出します。マッカーサー、リッジウェイ、アイゼンハウアー、アイケルバーガーなど、当時の新聞・ラジオをにぎわわせていた軍人たちです。このなかでは、後にアメリカ大統領となつたアイゼンハウアーが最も出頭です。もっとも、私はこの遊びがどうも苦手で、敬遠していました。

占領された日本の影は、田舎町にはほとんどありませんでした。ときたま、それらしい外人がジープに乗つてやってきましたが、遠まきにみていただけで、平和なものでした。

1952年ではよつが、中学校の修学旅行で、奈良に行きました。米軍キャンプが中心部にあり、日本女性(パンパンと呼ばれた)と外人のカップル(アベックといつた)をたくさん見ました。進駐軍とはこついつものかと驚きましたが、今思えば朝鮮戦争の最中で、国連軍として居たのでよつが。引率の先生が、奈良公園の近くに行かないよつと注意してい

ましたが、公園でキスするところを見た、大はしゃぎの生徒もいました。当時の田舎少年たちにとっては大事件でした。その時京都もまわりましたが、京都駅が建て替えられたばかりで、天井を隙間なく埋める蛍光灯の明るさに田舎少年たちは驚いて見まわしたものです。その近代建築も今は建て替えられ、あいかわらず修学旅行の田舎少年少女が見まわっています。

昭和天皇が備中高梁駅を通過したことがありましたが、1946年だったでしょうか。専用列車の停車中に、駅ホームのお立ち台で群集に帽子を振る天皇の姿が記憶にあります。

あの当時に天皇が全国をまわったのは、その地位をわざわざ残した占領政策の重要なイベントだったのでしょうか。これは明治政変後における明治天皇の全国巡幸とおなじようで、もしかしたらその故事に倣ったイベントだったのでしょうか。いつになっても民衆慰撫策は変わらないものです。

民主主義すくすく世代

それまで市内にあった中学校は新制度の県立高等学校となり、別に新制度の中学校が、近隣市町村が共同して組合立で設立されました。

その中学校に入学したころは、まだ戦後の混乱が尾を引いていたようで、1年生の時は新しい校舎が間に合わなくて、市内隣学区の小学校に間借りしていましたので、遠距離通学でした。といっても、田舎道を遊びながら、歩いたり自転車だったりとしたものでした。

2年生から新校舎ができ、3年生頃は次第に高等学校受験体制が整ってきて、教育現場は正常化していきました。田舎町では、もう戦争の時代は完全に終わりました。

それが50年代はじめ頃であり、その頃朝鮮半島で次の戦争が始まっています。隣国の不幸な事件が日本に戦争特需景気をもたらしたし、敗戦のどん底から経済復興したのです。戦中も戦後もかの国を踏み台に、この国の繁栄がもれません。

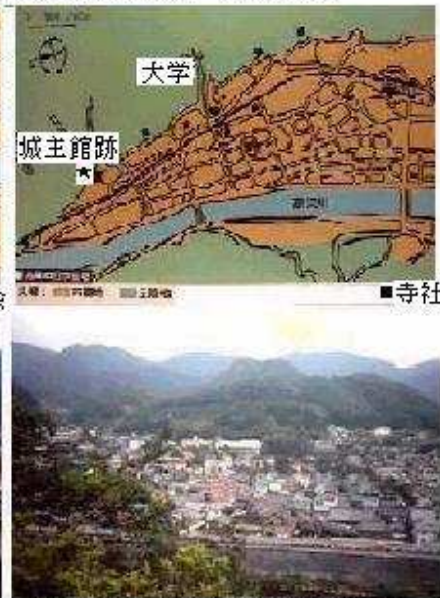
わたしは、民主主義教育の実験段階の先端を行っていた世代です。民主主義を疑うことを知らず、実験段階から安定段階までを歩んで育ったので、「民主主義すくすく世代」と自称しています。この自称は、よい意味であり、誇らしく自慢として言っているつもりです。

後にこの世代が、60年安保闘争の中心となっていたいわゆる安中派となり、高度成長時代を会社人間となって支えることになり、今はいわゆる定年を迎えた高齢社会予備軍です。敗戦という大きな節目を基本に考えると、この世代は新旧の中

よく似ているドイツのハイデルベルクと高梁のオールドタウン



ハイデルベルクのオールドタウン (ネッカー川対岸より)



高梁旧城下町 (高梁川対岸より)

間にあるらしく、たとえば今の総理大臣の森さんのような旧世代もいれば、わたしのようなどうにもそちらにはのれない者もいます。同世代の会合に出るとその感じがよく分かり、居心地よさと悪さが同居します。

ふるまひは今

少年の日の戦争体験をしたふるまひの高梁盆地は、いまでは、伝統的な町並みと古城のある、ちょっとは知られた観光地になっています。映画の寅さんシリーズに登場したところもある街です。あたり前ながら、戦争の影はどこにもありません。あるいはもしかしたら、町家の白壁に空襲よけの墨を塗ったところがあるかもしれませんが、でも、誰も気にもとめません。

生家の神社は、疎開児童のいた社務所も建て替わり、わたしの生家も消滅しましたが、例の鐘つき堂は健在で、町の観光ポイントのひとつです。

鐘は戦争に消えて鳴らしようもなくなっていました。近年、奇特な方のご寄付で、プラスチック製の鐘と時の鐘の音を吹き込んだテープレコーダーが鐘楼に設置され、タイムスイッチにより定時に鐘が鳴るのだそうです。これはどうも便利なような、味気無いような。

戦争教育を受けた小学校は、設立時に中学校が間借りしたもうひとつの小学校と合併して移転、木造洋館風の本館講堂だけが健在ですが、身分を替えて郷土資料館となっています。その中学校も今は移転してしまって、その跡地は家具工場です。

昔の高梁町は戦後に近隣村と合併して、今は高梁市といっていますが、その人口は3万人を切っています。4年制の大学ができ、高齢者よりも若い世代が多いという、田舎町には珍しい人口構造になっています。

数年前に、ドイツのハイデルベルクを訪ねた時に、その地形、風景、町並みの構造が、高梁とそっくりなことを発見して、ちょっと興奮しました。今や風景だけでなく、大学町であるというソフト面でも同じがもれません。

高梁を出てから43年、今はちょっと自慢したくなるふるまひです。どうぞ、おいでんせえ(おいで下さい)。

(完000514 補001029)

付記：このエッセイを書き始めた動機は、はじめに述べたとおりだが、書きあがったのは2000年5月14日、つまり母の日だったので、1冊だけのDTP出版物にして、大阪に住む今年90歳になる母に送った。だから、母に贈る小さな自伝となった。ここにインターネット版として載せるために一部補綴した。(2001.10.28 2版のため)